

## クリスマスのミサに来られた カトリック 徳山教会 の皆様へ

日頃から温かいご支援をいただき、ありがとうございます。

難民支援協会 (JAR) でコミュニティ支援や就労支援を担当している、鶴木由美子と申します。支援しているウィリアムさん(仮名)をご紹介します。

ウィリアムさんは母国では教師をしていましたが、政権批判をしたことを理由に命を狙われるようになり、一番早くビザが降りたという理由で、知り合いが一人もいない日本へ3年前に逃れてきました。道行く人に声をかけて JAR のことを聞き、事務所にたどり着きました。



日本に逃れてきた難民が滞在を続けるためには、難民申請をし、日本政府に難民として認めもらう必要があります。難民申請の結果が出るまでには平均3年かかり、3年待っても難民認定される人は非常に少ない現実があります。難民申請中は政府からの支援金を受け取れる場合もありますが、支援金を得る審査に数か月かかることも多く、受け取ることができず困窮する人も多くいます。ウィリアムさんは、JAR に相談をしながら難民申請を行い、政府からの支援金をもらうまでは JAR からの食料や宿泊場所の提供を頼りに日々を過ごしました。

その後、難民申請の結果が出るまでの間の就労を許可されたため、JAR が提供する「就労準備日本語プログラム」を受け、就職に必要な日本語やマナーを必死に勉強。その勤勉さを評価され、ある部品製造工場で働き始めることができました。日本語が流暢ではないため、困難を感じることは日常的にあると言いますが、職場の仲間の温かいサポートで一つ一つ仕事を覚え、時には生活上の悩みも相談し、助けてもらってきました。「日本に新しい家族ができたようだ」と嬉しそうに話してくれたときの顔が忘れられません。

ところが、やっと日本での生活に希望を見出し始めた矢先に、新型コロナウイルスの感染が広がりました。

何とか会社を存続させたいと社長も奮闘を続けてきたそうですが、夏を過ぎたところから経営がさらに悪化。ついに事業を一時止めざるを得なくなり、ウィリアムさんは自宅待機が続いています。そして先日、「このままでは収入が途絶え生活が立ち行かなくなってしまう」と、久しぶりにJARに相談に訪れました。



感染拡大は日本で暮らす難民の方の生活にも影響を与えています。もともと紛争や迫害から逃れてきた難民の方々は、日本で生活ができなくなったからといって、母国に帰るという選択肢はありません。

ウィリアムさんのように一見、経済的に自立できたかのように思えた難民の方々が再び不安定な状況におかれており、JARでは、現在職のない方も加えると、すでに120名を超える方から生計を維持するための就職・転職について相談を受けています。この就職難で新しい仕事を見つけることは非常に厳しく、就労支援はこれまで以上に難航しています。

昨年までは、たとえ日本語が不自由でも難民の方々の経験やスキルが高く評価され、雇用につながるケースもありました。しかし、コロナ禍により国内で多くの方が不安定な雇用状況にあるため、日本語が十分ではない人にとって就職はより困難となりました。JARでは食料提供などの生活支援も行う

ていますが、今年の冬は、一度就職をした方からも「食べるものがない」という相談があり、これほどまで困窮が広がる状況になるとは...という思いです。

このような状況の中でも前へ進むために、コロナ禍でも難民の雇用の継続に力を入れてくださる企業との協働、そして求人ニーズのある業界とは、新たな試みを通じ各企業と連携しながら就労支援を粘り強く行っています。就職が困難になっているからあきらめるのではなく、1日でも早く難民の方々が就職できるよう、日々の就労前訓練を継続して提供し、特に学んだ日本語を忘れないよう、また社会から孤立しないよう、オンラインを含めた伴走支援が重要だと考えています。同時に、食料の提供や特に脆弱性の高い方には宿泊の支援も行いながら、難民の方々の今日、明日をできる限り支えています。

日に日に寒さが増しています。難民の方々がこの冬を何とか乗り越えることができるように、カトリック徳山教会の皆様のお力を貸していただけませんか。託していただいたご寄付は、今ここの日本で助けを必要としている難民の方々への支援に活かします。



難民支援協会 定住支援部 チームリーダー 鶴木由美子

認定 NPO 法人 難民支援協会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-5-2 TASビル 4階

TEL:03-5379-6001 FAX:03-5215-6007 info@refugee.or.jp